

1920年代の文化、社会・政治状況に関する研究蓄積は日本でも厚い¹⁾。近年はさらに、ジェンダー、社会階層、世代、エスニシティを軸に、多様なモダニズムを生きだした同時代人の経験にも関心が向けられている。モダニズムを支えていた知と権力の配置を系譜学的にたどるだけではなく、それは同時代人の身体というテキストにどのように書き込まれ、本人はそれをどのように生きていたのかという問いも提起されている。こうした問題に迫る一つの手がかりとして、「新しい女」というテーマが挙げられる。

1920年代のドイツでは、都市の持つ匿名性、人工性、商業性が自然の調和を破壊し、性モラルも低下することが懸念されるようになったが、「新しい女」はこの文脈でも注目されていた。同時代の知識人も記しているように²⁾、都市を自由に闊歩する「解放された女性」はモダニティの経験を体現していたが、男性の「聖域」だった公共圏に出入りする女性は、近代に形成された性別役割規範の侵犯者であり、「男性化」(vermännlicht)した奇妙な存在でもあったのだ。当時の衛生学者、優生学者、教会組織などは、「新しい女」という現象—女性の男性からの経済的・性的な自立—が、家族ひいては国家の安定を脅かすことを危惧していた³⁾。「新しい女」の身体に書き込まれた言説、「新しい女」の発した言説、そして、こうした諸言説が機能していた社会の中に、当時の知と権力の配置が垣間見

えるのである。

この時代の「新しい女」という概念は、デパートの売り子から芸術家までを包括して、自活する、解放された女性を指すようになる。実は多くの「新しい女」は労働者階級や下層中間層の出身で、秘書、タイピスト、電話交換手など、当時の典型的な女性職に就いていたことも知られている⁴⁾。しかし「新しい女」の実態と意識の両側面を把握することは難しく、最近では「新しい女」のライフスタイルをめぐる表象に関する研究が盛んである⁵⁾。この分野での社会史と文化研究の連携も進み、社会構築主義やエスノメソドロジーの方法論から触発を受け、「新しい女」アイデンティティの構築過程に研究の力点がシフトしている。アイデンティティを形成する相互行為の〈場〉が着目されているゆえんである⁶⁾。

ここでは、特に「女ともだち」(Freundin)と呼ばれる「新しい女」が集っていたことで知られる「淑女クラブ」(Damenklub)に目を向ける。クラブという〈場〉における「女ともだち」の身体的実践に迫り、それが当時の社会の政治状況やジェンダー・ポリティクスと、どのように絡み合っていたのかを検討したい。それは、「新しい女」にアプローチする旧来の社会史研究から少し距離を置いて、その生活世界に今一步迫ろうという試みでもある⁷⁾。使用可能な史資料は、「淑女クラブ」を参与観察した女性作家のエスノグラフィ⁸⁾や、クラブシーンで読まれていた雑誌⁹⁾、当時ベ

ルリンを訪問した日本人のエッセイなどである。

女優のマルゴ・リオンとマルレーネ・ディートリヒが 1928 年に初演されたレビュー『何か起こりそうだ』で歌った「仲良しの女ともだち」は、その当時大変な話題となった。女ともだち同士の買い物シーンは、都市の消費文化と女性の時代を象徴していたのである¹⁰⁾。1920 年代のベルリンでは、まさにこの「女ともだち」の担う文化が異彩を放ち始めていた。「女ともだち」という女性集団は、前衛的で高名な芸術家でも、作家や画家でもないで、文学や絵画という大文字の「文化」を後世に伝え、多くの人の記憶に残ったわけではないが、ひとつの斬新なスタイルを作り上げている。それは「女ともだち」同士が交わす言葉、お気に入りの歌、髪型、服装から、誰と暮らすのかといったライフスタイルにまで至る、生活に密着したサブカルチャーである。一人ひとりの織り成す身体的実践が、まとまりをもつ一つの流れを形作っていたといえる。当時のカヴァレットやレビューを彩ったスターたちの影に隠れて、「女ともだち」の存在は長いこと忘れられていた。しかし、「仲良しの女ともだち」がヒットしたのも、この歌のモチーフであり、彼女たちの支持基盤でもあった無名の集団なくては考えられない。しかしだからといって、この集団をある特定の職業、社会階層や性別という旧来の社会史的カテゴリーによって包括することは難しい。

「女ともだち」に触れる先行研究を検討すると、「女ともだち」という言葉が「女性同性愛」を示す隠語として理解され、この言葉が成立した意味や過程、この言葉の

持つより豊かな含意が示されていないように思われる。ここでは先入観から自由になって、この言葉が生れ、使われるようになった社会で一体何が起きていたのかという点に注目したい¹¹⁾。そこで、「女ともだち」の生きた世界にまで立ち戻って、その集団形成のあり方を検討し、さらにこの集団が持つ政治的・文化的ポテンシャルに迫ってみる必要があるだろう。

本稿では先ず、「女ともだち」が集い、小さなグループやサブカルチャーを形成する基盤ともなった「淑女クラブ」を概観したい。近代市民社会の担い手たる各種協会やクラブ、また居酒屋などは、多くの場合男性市民・労働者が独占していたので、女性の痕跡はそこに例外的に認められるにすぎない。現在では想像し難いだろうが、後に触れるように、女性が一人レストランで食事をする事さえ、スキヤングルだった時代もあるのである。こうした時代背景を考えるならば、女性だけでも自由に出入りすることができ、女性だけが運営する「淑女クラブ」の出現というのは、かなり画期的な出来事であったといえるのだ。

ドイツ語で女性の友達を意味する *Freundin* は、現在ではとりたてて憶測を呼ぶような言葉ではなく、日常的に使用されているが、1920 年代以前のドイツ語圏社会ではまだある種の緊張感をはらんでいた。18 世紀以降、生物学的・解剖学的な差異を指標に、人間の性別が二項対立的に把握されるようになる。女性と男性は相異なる、そして、相互補完的な存在となったのである。19 世紀にもなると新興の性科学や精神病理学が、性別の境界を侵犯する女性を「男女」と名づけ、「女性の男性化」として間

題視するようになっている。例えば 1870 年に精神病理学者のカール・ヴェストファルは、「転倒した性的感覚」を持つとされる女性同性愛者の症例を、精神病理学史上初めて紹介している¹³⁾。女性同士の友愛もまた、こうしたバイアスを孕んだ枠組みの中で理解されるようになる。性的な関係よりも精神的な繋がりを含意する友愛は、生殖という営みとは無縁な、そして、力関係が対等な男性間に限って成立すると認識されていた。一般の女性が両親、兄弟姉妹、子ども、夫との排他的な愛情・義務関係から自由になることはほとんど不可能であり、知的関心や趣味を共有するという理由だけで、女性と友情関係を結ぶことは実際に困難だった。女性間の友情、「女ともだち」の成立は、女性の社会・文化的な解放と不可分だったのである¹⁴⁾。ヘレーネ・ランゲやゲルトルート・ボイマーなど、ドイツの女性解放運動で活躍し、互いに協力していた女性たちは、男性的であるとか「レズビアン」であると、中傷されることもあったという。女性間の友愛 (Freundschaft) は、同時代人の理解を超えていたのである。

批評家のヴァルター・ベンヤミンによれば、女性は 19 世紀になると工場労働者として雇用されるようになり、特殊な労働環境の中で男性的な特徴を身につけるようになったという¹⁵⁾。女性の「男性化」はまず、労働や政治活動を通じて不可避免的に生じている。しかし 1920 年代のベルリンでは、自己主張やファッションとしての、女性の男性化がクローズアップされることになる。「新しい女」というモダンなイメージとも重なり合っていたこの時代の女性の男性化は、メディアでも盛んに取り上げられ、賛

否両論をひき起した。この頃「男気取りの娘」の間で断髪やマニッシュなスタイルが流行し、『ベルリン絵入り新聞』(1925 年 3 月 25 日)には、「もうたくさん！女性の男性化に反対」という標題の記事まで登場した。ところで、第一次世界大戦のドイツの敗北が戦後のジェンダー関係に与えた影響として、男性性の危機がしばしば指摘される¹⁶⁾。男性が心身ともに傷を負い、理想的な男性のあり方が危機に瀕していたのとは対照的に、戦時中に銃後で活躍した女性が自立の足がかりを得て、戦後に「新しい女」として社会の中心に躍り出たという理解である。女性は実際に、政界、大学や職場に限らず、盛り場やカフェなど従来であれば男性が独占してきたような場所でも、積極的な役割を果たすようになったのである。男装した女性が夜な夜な集うバーやクラブが賑わうことでも、ベルリンはパリと並んで世界的にも有名だった。世紀転換期のドイツでは、男性の同伴なく女性が一人レストランで食事をすることさえスキャンダルだったという。独り身の女性は、女性同士で気軽に飲んだり、食べたり、歓談できるような場所を心待ちにしていた。ヴァイマル時代には結社の自由が保証され、女性の政治的活動や各種の集会在り許可され、「貯蓄協会」(Sparverein)などの偽名を用いて、密やかに存続していたベルリンの「淑女クラブ」の数も、実に 70 店舗近くまで増大した。

「淑女クラブ」を概観すると、店の趣向、性格、客層は多種多様で、店の位置する場所によって、訪れる客層やその趣味が異なっていたことが分かる。エレガントな女性はベルリン西部のビューロー通りやマルテ

イン・ルター通りに、経済的な余裕がなく身だしなみにもそれほど気を遣わない女性は、労働者が居住するアレクサンダー広場側のゲオルゲン通りに集まる傾向にあった。なかでも「モンビジュー」や「ヴィオレッタ」というクラブは、それぞれ人権擁護組織に加盟し、その組織が刊行する機関紙を購読していた。例えば人権同盟に加盟していた「ヴィオレッタ」では、雑誌『女ともだち』誌が購読されていた。「女ともだち」というアイデンティティの構築や、「女ともだち」相互のネットワークを形成するのに大きく貢献したのが、まさにこの雑誌である。こうした雑誌の購読や「淑女クラブ」での活動を通して、病的なニュアンスを持つ同性愛者やレズビアンというレッテルを貼られた女性たちのなかで、外部から押しつけられたこのネガティブなアイデンティティを、「女ともだち」というポジティブなアイデンティティへ転化させるポテンシャルが育まれたのである。「淑女クラブ」で行われる行為をはじめ、そこで交わされる言葉、身につける洋服や片眼鏡などの装身具は、仲間内だけでその意味が通じるコードとして機能し、「女ともだち」独自のサブカルチャーを形成した。「淑女クラブ」で実践されていたサブカルチャーの特徴をまとめると、男性不在の中にあってあらゆるイニシアチブを握り、男性の服装・振る舞いを自分なりに「模倣」することだった。それは、男女の役割規範を攪乱させることで、自明とされてきた性差が、実は演じることが可能なものにすぎないことを暴露することでもあった。しかしながら、「女ともだち」の間で当初から「運動」や「政治」という明確な概念が共

有されていたわけでない。ここで紹介してきたような一連の身体的実践を通じて、一つのアイデンティティが構成され、それが現実性を獲得する場として「淑女クラブ」や『女ともだち』誌が存在していたのである。

こう考えると、「淑女クラブ」は一般的な理解に反して、日常から逃避するための、単なる「気晴らし」の場でもなかったことが分かる。「淑女クラブ」で夜毎繰り返されていた喧騒の背後で、民族主義的な動きの台頭、検閲の強化など、時局は悪化し、「女ともだち」をめぐる状況も切迫していった。失業の危機にさらされる者が現れたことは無論、ネットワークの拠点であった「淑女クラブ」や『女ともだち』誌といった、カウンターカルチャーに対する取締りも強化された。1932年には「淑女クラブ」でのダンスパーティーや集會が禁止されている¹⁶⁾。こうした状況を正面から受け止め、1920年代後半になると『女ともだち』誌の掲載記事の内容も深刻さを増し、寄稿者の政治的な発言も活発化していった。

同時代に台頭しつつあったナチスのイデオログは、女性の政治的・経済的・性的解放を助長するような「女ともだち」の動きを、危機感をもって受け止めていた。1925年にハンス・フォン・ヘンティヒは、活発化する女性の社会進出を指して、「近年女性の同性愛的傾向が、ある種の攻撃性を帯びて世間に押し寄せている」¹⁷⁾と記し、1931年に発表されたアントン・シュッカーの『女性運動の精神病理学』でも、性的に「頹廢した」女性と女性運動とが結びつけられている¹⁸⁾。1915年に戦死者数が出生数を上回ったことを契機に、ドイツで進

行しつつあった出生率低下に対する危機意識は急激に高まった¹⁹⁾。生殖を司り、子どもを養育する女性の身体は、民族の存亡を賭ける政治のアリーナとなったのである。結婚して子どもを産むという「本来の義務」を等閑視して、自己実現や「享楽」にいそしむ「女ともだち」への風当たりも当然のように強まった。『女ともだち』誌は1928年に青少年に悪影響を与えるという理由から「低俗・猥褻文書」であるという判決を受け、1年間の刊行停止処分となり、1933年には終に廃刊へと追い込まれることになったのである。

限られた紙幅では十分に伝えることはできなかったが、「女ともだち」の動きの中に、ヴァイマル時代の大都市ベルリンにおける、文化、社会、政治の動向が凝縮されているように思われる。「女ともだち」とは、理想とされる女性の陰画であった。

「女ともだち」の対極に位置していたのは、「近代家族」を支える主婦であり、従順な娘だったともいえる。すると、この動きは近代国民国家の形成と不可分であり、ドイツに特有な現象でもないはずである。「女ともだち」、あるいはより広義の「新しい女」という視点から近代を振り返る試みは有意義であろうし、実際にその国際比較も進んでいることを付記しておきたい²⁰⁾。

【注】

1) 『思想』1981年10月号 No. 688(特集1920年代・現代思想の源流I); 南博編『日本モダニズムの研究: 思想・生活・文化』プレーン出版1982年; 平井正・岩村行雄・木村靖二『ワイマル文化: 早熟なく大衆文化のゆくえ』有斐閣1987年; 生松敬三

『20世紀思想涉獵』岩波書店2000年等。

2) Fromm, Erich, *Arbeiter und Angestellte am Vorabend des Dritten Reiches: Eine sozialpolitische Untersuchung* [1929], München: Dt. Taschenbuch-Verl., 1983, S. 168.

3) Forel, August and Fetscher, Rainer, *Die sexuelle Frage*, München: Reinhardt, 1931, S. 105, 113. 日本の研究者による関連する研究として、川越修「国民化する身体: ドイツにおける社会衛生学の誕生」『思想』第884号・1998年; 市野川容孝「社会的なるもの概念と生命: 福祉国家と優生学」『思想』第908号・2000年; 木畑和子「第9章 マイノリティ」矢野久他編『ドイツ社会史』有斐閣コンパクト2001年所収等が挙げられる。

4) Frevert, Ute, *Vom Klavier zur Schreibmaschine. Weiblicher Arbeitsmarkt und Rollenzuweisung am Beispiel der weiblichen Angestellten in der Weimarer Republik*, in: A. Kuhn (Hg.), *Frauen in der Geschichte. Frauenrechte und die gesellschaftliche Arbeit der Frauen im Wandel*, Düsseldorf, 1979, S. 82-112; Dies., *Traditionale Weiblichkeit und moderne Interessenorganisation: Frauen im Angestelltenberuf 1918-1933*, in: *Geschichte und Gesellschaft* 7, 1981, S. 507-533.

5) Ankum, Katharina von (eds.), *Women in the Metropolis: Gender and modernity in Weimar culture*, Berkeley, Los Angeles and London, 1997; Meskimmon, Marsha and West, Scearer (eds.), *Visions of the "Neue Frau": women and the visual arts in Weimar Germany*, Aldershot [u. a.]: Scolar Press, 1995.

6) Connell, R. W., *Gender*, Cambridge: Polity Press, 2002.

7) Ankum, Katharina von (eds.), *Women in the*

- Metropolis: Gender and modernity in Weimar culture*, Berkeley, Los Angeles and London: Univ. of California Press, 1997; McElligott, Anthony, *The German Urban Experience 1900-1945*, London: Routledge, 2001.
- 8)Roellig, Ruth Margarete, *Berlins lesbische Frauen*, Leipzig C 1, Kohlgartenstr. 26: Bruno Gebauer Verl. f. Kulturprobleme, 1928.
- 9)*Die Freundin* (1924-1933)
- 10)Rotthaler, Viktor (Hg.) *Marcellus Schiffer. Heute Nacht oder nie*, Bonn: Weidle, 2003.
- 11)Kokula, Ilse, Freundinnen, in: Soden, Kristine von (Hrsg.) *Neue Frauen. Die ZwanzigerJahre*, Berlin (West): Elefanten Press, 1988; Eickenrodt, Sabine, Über Freundschaft und Freundinnen, in: *Querelles: Jahrbuch für Frauenforschung*, 1998.
- 12)Westphal, Carl, Die conträre Sexualempfindung, Simptom eines neuropathischen (psychopathischen) Zustandes, in: *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten* 2, 1870, S. 73- 108.
- 13)Velsen, Dorothee von, “Über die Freundschaft”, in: *Die Frau* 30, H. 12, September 1923.
- 14)W・ベンヤミン「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」、野村修編訳『ボードレール 他 5 編 — ベンヤミンの仕事 2 — 』、岩波書店、1995 年。
- 15)拙稿「シンポジウムの記録：芸術、ジェンダー、ポリティーク — モデルネにおける男性性の構築 — 』『女性史学』（第 13 号・2003 年）所収
- 16)Diels, Rudolf, *Lucifer ante portas*, Stuttgart : Dt. Verl.-Anst., 1950.
- 17)Häntig, Hans v., *Die Kriminalität der lesbischen Frau*, Stuttgart: Enke, 1959.
- 18)Schücker, Anton, *Zur Psychopathologie der Frau- enbewegung*, Leipzig: Kabitzsch,1931.
- 19)Usborne, Cornelia, *Frauenkörper-Volkskörper. Geburtenkontrolle und Bevölkerungspolitik in der Weimarer Republik*, Münster: Verl. Westfälisches Dampfboot, 1994, S. 36.
- 20)例えば 2000 年に英国マンチェスターで、The New Woman in the National and International Periodical Press, 1880 to the 1920s と題される国際会議が開かれている。